東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

経験学習としての「自己推薦文」執筆：英語科教員の海外大学進学支援のあり方に関する一考察

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-03-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小俣,岳
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/152376

東京学芸大学附属高等学校紀要　57　pp.71～76，2019

経験学習としての「自己推薦文」執筆

―英語科教員の海外大学進学支援のあり方に関する一考察―

Experiential Learning Through Writing Personal Statement for UK College Application
― How to Support Students' Studying Abroad as an English Language Teacher ―

英語科　小　俣　　岳

＜要旨＞
高校生にとって，学習旅行や短期海外研修等，海外体験は一層身近なものとなってきている。そのような中でも例年，本校でも進学先として海外の大学を希望する生徒が一定数いる。出願時に必要となる書類のうち自己推薦文（Personal Statement）では，生徒が自らの過去，今，未来について限られた語数で大学側に伝えなければならない。この執筆の中で，生徒は自己の振り返りを通じ自己認識を高め，自分を見せるために書くことについて経験的に学ぶことになるだろう。

＜キーワード＞　高校生　Personal Statement　自己認識　経験　振り返り　教材開発

１．本稿執筆の動機

異文化体験や外国語学習の一環として，高校生が海外で様々な学習をする機会が増えてきている。最新の調査によると，高校生の留学者数が５万人に迫り，過去最多となっている（文部科学省，2019）。そして，高校入学前および高校在学中の海外体験を契機に，卒業後の進路として海外大学を希望する生徒も増えつつある。本校では既に高崎（2013）で触れられているように，海外大学進学のための指導実績がある。高崎の論考から６年が経ち，近年の本校海外大学進学指導にかかる実態を見る中で，改めて英語科教員としてどのような支援ができるのか関心を持った。そこで今回，本校着任以前に，海外大学進学指導のための教材作成とその理論的背景をまとめたことがあったことから（Omata, 2017a, 2017b），そこで得た知見を含め現状を分析し，更には生徒の主体的で深い学びに繋げたいと考えるに至った。

海外大学進学においては様々な準備が必要であることが上掲高崎（2013）でも指摘されているが，今回は生徒が一番苦労するであろう自己推薦文（Personal Statement，以下 PS と呼ぶ）に焦点を当てることにした。調査を進めると，自己推薦文そのものを分析しようとした研究は日本国内でまだ少ない。そこで，筆者が実際に PS を執筆した経験を踏まえつつ，そこで要求される文章に注目し，その作成過程で生徒は何を学ぶのか考察する。

２．自己推薦文（Personal Statement）

本稿ではイギリスの大学学部進学時に提出する PS に着目する。欧米圏の大学は，呼び名は異なるが（Statement of purpose，A letter of intent，Statement of intent 等），こうした自己推薦文に類する文章を出願時に提出することが義務付けられている。

２．１．PS のフォーマット

はじめに，イギリスの大学学部課程への出願はすべてオンライン上のウェブサイト「UCAS」で行われる（https://www.ucas.com/）。各種の個人情報とともに PS はアップロードされる。

PS には，アルファベットで 4000 字，47 行（スペースと空白行も含む）という語数・分量の制約がある。この分量は概ね，語数にして 600 ～ 650 語程度である。この語数は，日本人の一般高校生にとっては，多いと感じるかもしれない。英検準２級が想定するライティングの語数を見ると，概ね 50 ～ 60 語程度である（公益財団法人 日本英語検定協会，2019）。また，大学入試の「自由英作文」と呼ばれる出題形式の問題でも 50 語程度から 100 語程度ものが多いだろう。もっとも，試験のように短時間で書くのではなく，以下で論じるように PS は時間をかけながら書くことができるものであり，教師や他の生徒と協働的に進める余地がある文章である。したがって，生徒は心理的な負荷を小さくしながら，場合によっては楽しみながら，取り組むことができるものと考えられる。

2．2．PS の内容と構成

UCAS ウェブサイト上には各所に，PS に盛り込むべき内容が明記されている。UCAS（2014a）に従い簡単にまとめると，⑴大学で専攻したい分野とその理由，⑵これまでの学習が大学での専攻分野とどのように関連しているのか（大学での専攻分野について，高校時代に何を学んだのか），⑶関連するボランティア経験，職業経験があればその内容，⑷専攻分野と関連する趣味，⑸特筆すべきスキル，⑹自己 PR，以上を盛り込むべきとされている。大学側が求めていることと，生徒が応えなければならないことが明確になっていると言える。⑴～⑹にバランス良く触れながら，導入と結論を入れて，上記の字数・語数にまとめてゆく。

3．PS 執筆の過程

次に，実際にどのように PS を執筆するのか，筆者がかつて PS を執筆した経験に触れつつ，教育学や応用言語学の分野における先行研究を踏まえながら具体的に論じる。

3．1．筆者の PS 執筆体験

筆者もかつて，進学のための PS を執筆した経験がある。選抜の流れは異なるものの，PS に求められる要素はイギリスの学部進学時に求められるものと相違ない。すなわち，そのコースを志望する理由，学習歴（所属していた教育機関を羅列するのではなく，その時々で何を学んだのか記す），職歴，社会貢献活動，そして大学院修了後の計画について具体的な記述が求められた。加えて，所属コースや専攻分野でいかに contribute（貢献）できるのかについても盛り込むべきという指摘（Berkeley Graduate Division, 2019）もあったことから，自分のこれまでの経験を深く振り返り，記述することを徹底した。

英語教育に関するコースを志望していたため，まず英語教育へ関心を持った経緯を説明した。それまでの学習歴や職歴との関連付けもしながら具体的に説明することを心掛けた。具体的に関わったプロジェクトや，そこでの困難だったことや挑戦について記述し，自分の中に教訓として留めておいたことを素直に書き出した。そして，それらが大学院での学びにどのように繋がってくるのか，なぜその大学のそのコースで学ぶ必要があるのかという話題に繋げた。さらに，志望しているコースで実際に開講されている授業や研究プロジェクト等にも言及し，自分のニーズと志望先のコースが合致していることを具体的に書いた。そしてここで重要なことは，一定程度「社会的な」問題意識，課題設定をした点である。筆者の場合は英語教育，とりわけテクノロジーと英語教育について関心を持ち，学習や業務にあたっていた。当時，公教育の世界にデジタル教科書等のデジタルコンテンツを導入する動きが始まっており，その中で自分にできたこと，できなかったことを分析し，そのギャップを埋めるために大学院での学びがあると位置付け，課題解決に資することを主張した。

以上の執筆は，全部で半年程度要した。しかし，その間に，大学時代の指導教員や別の分野で働く友人，さらには実際に志望コースで学位を取得した方々に話を聞く機会にも恵まれた。そうした中で PS は更に磨かれ，そして自分自身の中にも留学する目的や意義，問題意識が先鋭化されていった。

実際，PS を書く中で，自分がこれまで何をしてきたのか，これからの職業人生で何を実現したいのか，といった点が一層明確になった。また，たくさんの人からのコメントをもらうという経験は，それに対しこちらが応答するというやり取りを経て自己認識を深めることになったと実感した。自らの経験を振り返ることで自己認識を高め，言語化し相手に伝えるという流れが PS 執筆の基本的な流れであるということを，自ら経験することができた。

3．2．振り返りと自己認識

翻って，高校生がイギリスの学部進学を希望した際に執筆する PS についても，上記同様に生徒が自分自身のそれまでの経験を振り返ることから始めるべきである。いわゆる“Pre-writing task”として，ブレイン・ストーミングを行う。高校入学から執筆時点までの経験を振り返り，場合によっては高校以前の経験などまで含めて振り返ることもあるだろう。本校は校内行事が多く，その行事を振り返ることから始めるのも良い。例えば，各学年の教科行事や，学習旅行，さらに探究活動で設定したテーマとその研究内容，アウトプットなどが対象となるだろう。あるいは，部活動での経験や，校外での活動について振り返ることも有益であろう。そして，以上の経験が現在の自分をどのように構成しているのか説明する。ただし，高校入学以前の経験までを詳細に盛り込もうとすると，指定語数に収まらない可能性があるので注意を要する。

振り返りの方法は多数の研究の蓄積があるが，PS 執筆時には下図に示す Gibbs（1988）の“Reflective cycle”

モデルが有益な振り返りを行う指針となるだろう。下図について概説すると，まず経験の記述から始め，そこでどのような感情を持ったのか想起した上でその経験に価値付けを行う。それらを分析し結論として教訓化しておき，その後の行動指針に結びつける。いかに経験から学ぶことができているのか，そして幅広く自分について知り直す必要が出てくる。

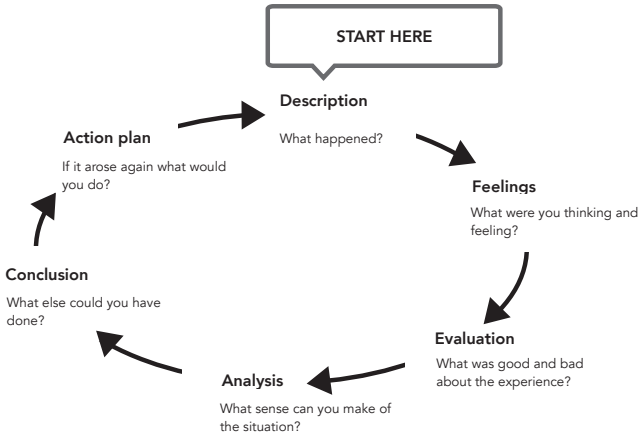

図１　Gibbs（1998）の振り返りモデル

生徒は学校内外問わず様々な経験をしているはずであるが，経験から何を導き出しているか，その経験を自分の生き方にどのように生かしているか，上記のサイクルの中でいかに深く考察できているのかという点が重要であると言える。また，多数の経験が単発的に存在しているのではなく，相互に関連しあっているかどうかという点についても，考慮が必要である。もっとも，生徒は経験を振り返るよう言われたとしても，あまり多くを出せない可能性もある。この点について Sawyer（2016）は PS の方向性を４つに分類している。

A	B
Student **has** faced significant challenges and **does know** what he or she wants to study.	Student **has not** faced significant challenges and **does know** what he or she wants to study.
C	**D**
Student **has** faced significant challenges and **does not know** what he or she wants to study.	Student **has not** faced significant challenges and **does not know** what he or she wants to study.

表１　PS の４類型（Sawyer, 2016;p.21 より引用）

この４つの分類によれば，PS には必ずしも大きく目立つ経験が盛り込まれていなくても良いことがわかる。D のように，大きな挑戦などもなく，大学での学びたいことも不明瞭であっても，PS が成り立つことを示唆しているのである。その上で，PS に含まれる経験を，挑戦とその結果，感情，行動，価値付け，以上５観点で分析できているのかという点こそ重要であるという。これは上掲 Gibbs（1988）のモデルとも附合しており，経験そのものよりも，それをいかに振り返り，自己認識に繋げられているのかがやはり問われているのである。

以上のブレイン・ストーミングを踏まえ，PS に盛り込むべき出来事をいくつかに絞る。経験への優先順位をつける段階であるが，その際，どのような自分を入学審査官に伝えたいのかという点を念頭に置く。

Self-representations in writer identity construction of a personal statement.

Self-representations	Presentations in a personal statement
Autobiographical self	Life experiences narrated and the insights
Authorial self	Self-mention & name-dropping
Discoursal self	The desired image created in writing
Possibilities for selfhood	Institutional & socio-cultural constraints and possibilities

表２　PS に表出する様々な自己（Ivani, 1998）

上掲の表は Ivani（1998）が説明した，書き手がどのような自己を文章に表出させるのかという分類である（Li and Deng, 2019 より再引用）。特に PS のように経験を元に自己表現をする文章では，どのような「自己」が文章中に表出しているのか分類した上で，それらを効果的に組み合わせ，PS を執筆することが肝要である。そして，この分類をもとに，Li and Deng（2019）では PS の執筆という行為が，自己認識とアイデンティティの確認に資するとまとめている。言うまでもなく，自分を深く知り，理解をしなければ PS の文章は書けない。こうした考えをもとに，生徒は振り返りから得られた自分像についてさらに深い理解と意味づけを行うことになる。その結果，生徒は振り返りと価値付けに留まらず，自分とは何者であり，何がしたい人間であるか，自己認識を高める。中原（2019）は理想の自分や，自分が何をしたいか語ることのできない大学生について触れている。これはおそらく，高校時代までに振り返りとそれに基づく将来設計，そして自分のしたいこと・できることの棚卸しが不足していたことに起因するのだろう。PS 執筆の過程で，こうした生涯に渡って必要となる考え方や行動様式の一つを身につけることもできると言えよう。

３．３．“Genre-based approach”による執筆

PS のように，ある特定の目的や機能を持った文章は，“Genre-based approach”と呼ばれるライティングの方法論に依拠し，内容・言語・表現を相互に調整し，結び

つけながら書き進めることも有益であるとされる。PSのジャンルは，Johns（2015）によれば次のように定義される。

> … this genre is reminiscent of a short memoir in that it is a deeply personal, voiced and context-embedded account of an event, experience, or relationship, framed by a controlling theme（“the point”）.

Johns（2015）, p.117 より引用

すなわち，極めて私的であり，個人の声や文脈依存的な出来事，経験，関係性の説明が必要されるジャンルなのである。大学という高等教育機関に提出される半ば「公的な」文章でありながら，極めて個人的な性質を帯びたものであり，出来事や経験やそれらの相互連関について，テーマに沿って組み立てるべきとされ，そうした前提で書き始める必要があるだろう。

さらに，表現技法については，上述の通り，特に感情や価値に関する表現の仕方に熟知しておく必要がある。実際，上掲 Sawyer（2016）では，感情や価値を表す形容詞を一覧にしている（pp.127-128 など）。このような観点から語彙の学習をすることは，普段の英語の授業においても有益な視点であると言えるだろう。このように，自己表現のための言語材料を十分に持っておくことも，PS 執筆には必要不可欠であることがわかる。

ジャンルに対する深い理解をした上で，執筆を進めることになる。書くことは概して個別化されている印象を受けるが，Feez（1998）は次のような執筆の方針を示している。

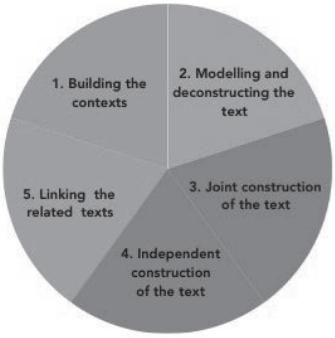

図 2　Feez（1998）による Genre-based writing process

この方針に当てはめて実際の執筆過程を考えてみると，まず PS の文脈を設定し，PS がどのように読まれ，どのような文章なのか明確に定義し，教師と生徒との間で認識を一致させる。そして PS のサンプルを見ながら，生徒が自分なりにその意味を再構築し，他者と協働しながら執筆する。協働の中で見出した知見をもとに，個別でさらに執筆を進める。上述のように，高等教育機関に提出される公的な性格を持ちながらも，合格・不合格を決めるという“Gatekeeper”とも言うべき読み手を想定した文章を書かざるを得ないため，むしろオープンで協働的に取り組むことで常に「他者の目」に自身の PS を晒しながら執筆を進めることが重要である。そして，Johns（2015）は，PS というジャンルの文章執筆経験は，大学入学後にも必要となる柔軟な表現技法を身に付け，ジャンルそのものを深く理解した上で文章を執筆する習慣づけを行い，そしてリテラシーへの深い配慮も身につく端緒となるという。以上をまとめると，PS の執筆過程は自己と他者との視点の交換が絶えず行われるもので，その基盤として深い自己認識と洞察，他者と関わり合う力が身についているのか試されていると言える。これは確かに，知識を測るための試験では問えない部分であり，独自に対策をする必要があるものと考えられる。

3．4．PS 執筆のための教材作成

以上の執筆過程を可視化し，他者と共有し協働でできるよう，筆者はかつて教材を作成し，教材を使用した全部で 8 時間分の授業シラバスを作成した（Omata, 2017a）。そこで留意したのは，他者と協働しながら PS 執筆作業を進めるという点である。Pre，While，Post と 3 段階の随所にディスカッショントピックを盛り込み，話し合いをする中で自己への理解を深める契機を作った。そして，PS というジャンルの文章に慣れることも意図し，例えば PS に関する説明文を読むことや，以前の学生が書いたという PS の分析をするタスクなども設定した。更に資料編として，よく使われる言語や言い回しのリストも入れるなど，ジャンルへの言語的な気付き（awareness）を高めるようにした。さらに，書くという行為そのものにも注意が向くよう，例えば Free writing の手法について言及し，時間を決め集中的に書き続けるというタスクも設定した。

本教材とカリキュラムは，日本人の高校生が無理なく準備を進められるよう設計しており，実際に利用して海外大学進学指導することを想定している。そして，教材の内容を見直しながら継続的に指導体制を構築もある。海外大学進学を目指す生徒がもし，筆記試験で合否が決まるという考えを大きく持っていれば，進学に必要な英語スコアの獲得やその他の試験の対策に注力しすぎてしまうだろう。しかし，それは誤りであり，筆記試験部分

と PS のような文章は同等に評価対象となる。したがって，筆記試験以外の部分にも十分時間をかけ，一定程度教師がリードしながら執筆を進めることが求められているのではないだろうか。

4. 考察と結論

ここまでの議論を踏まえ，まず，PS の執筆過程は「自分の経験を振り返って，とにかく指定語数で書く」だけでは不十分であることがわかる。特に単発的な経験だけでなく，経験からの学びを更に次の経験と関連付けることができ，その繰り返しを経て「その生徒らしさ」が見えるように書けているかという視点が必要不可欠であると言える。換言すれば，PS の中にその人の「ストーリー」が詰まっているかという点が重要である。もっとも，4000 文字で，生徒が自分のそれまでの人生を振り返り，今後の展望をまだ見ぬ相手（入学審査官）に伝えるということは，非常に難しいかもしれないが，生徒にとっては自分がどのような大学生になり，どのような人間として生きてゆきたいのか設計する貴重な機会ともなる。文章に思いや情熱を込め，自分をアピールするという経験も，それもまた一つの大きな経験学習の機会であると言える。

一方，PS というジャンルの文章執筆の難しさも露呈した。すなわち，①上述のように，「ストーリー」とも言うべき流れがある文章となっていなければならない（高い coherence と cohesion をもって書かれていなければならない），②適度に自分を PR できており「この学生を入学させれば，大学側にはこのようなメリットがある」「この学生の将来が見てみたい」と思わせられなければならない，③程よく「謙虚さ」が含まれていなければならない（Brown, 2004），以上 3 点が大きく挙げられるだろう。以上の困難さは，内容と表現にそれぞれにおいて，私的な事柄を（権力性を前提とした）公的な文脈において書かねばならないという状況から発生するものでもあるだろう。「書こうと思えばいくらでも書けるかもしれない。しかし，書かねばならないポイントは盛り込まれなければならないし，読み手の反応も気になる。」という，生徒にとっては，場合によっては着手しづらいジャンルの文章かもしれない。しかし，筆者が編んだ教材やたくさんの大人，友人と力を合わせながら，PS の読み手である入学審査官という読み手を想定した文章の書き方を習得し，読み手の思考や進学先の分野の人々の考えを先回りして読み，PS に入れられるよう準備を進めてゆくことが求められる。

5. 今後の展望

本稿では海外大学進学の中でも特にイギリスに絞って論述した。言うまでもなく，PS に類する，自分を紹介しアピールするための文章は，大学進学以外の局面でも多数求められる。経験を必要に応じて言語化し，自分の中に残しておくという一連の流れは，教科学習とともに学校教育の中で身に付けておくべき技能であると言える。

そして，海外大学進学支援は，教師が一方的に情報を与えて進学を指導する，という形では成り立たないと言える。むしろ，教師と生徒という立場を超えた学習コミュニティを形成し，同様の進路を希望する他の生徒とともに進学準備をしてゆく，ピア・サポートの体制を構築し，教師はその中でコーチングの役割に徹する必要があるものと感じる。そこで筆者は特に，大学で近年多く設置され始めている「アカデミック・ライティングセンター」のような組織が高校にも必要ではないかと思い始めている[1]。書くことについて，より主体的に，対話的になるために，そうした組織が中心的な役割を担い，高校における学習活動と進路指導を有機的に結びつけることが，教師には求められているものと考えている。

参考文献・引用文献

Berkeley Graduate Division（2019）*Writing the Personal Statement*. Available at: https://grad.berkeley.edu/admissions/apply/personal-statement/.

Brown, R.M.（2004）Self-Composed: Rhetoric in psychology personal statements. *Written Communication*, 21(3): 242-260. doi:10.1177/0741088304264338.

Feez, S.（1998）*Text Based Syllabus Design*. Sydney: Macquarie University.

Gibbs, G.（1988）*Learning by doing : a guide to teaching*

[1] アメリカでは 1970 年代から設置が相次ぎ，今でも多くの学校が当該センターを持っているという。日本国内では，東京都三鷹市にある私立国際基督教大学高等学校が，高校版アカデミック・ライティングセンターを 2010 年，日本で初めて設置した。「チューターとの対話を通して、書き手が自分でよりよい文章を書いていけるようにサポートする文章作成支援の機関」として，高校の学習活動を総合的に支援する機能を持っている。同センターの 3 年間の実践の記録について仲島（2013）が詳しい。

and learning methods. London: Further Education Unit.

Ivani, R.（1998）*Writing and Identity: The discoursal construction of identity in academic writing*. John Benjamins Publishing.

Johns, A.M.（2015）Moving on from Genre Analysis: An update and tasks for the transitional student. *Journal of English for Academic Purposes*, 19：113–124.

Jones, S.（2013）"Ensure That You Stand Out from the Crowd"：A Corpus-Based Analysis of Personal Statements according to Applicants' School Type. *Comparative Education Review*, 57（3）: 397–423.

Li, Y. and Deng, L.（2019）I am what I have written: A case study of identity construction in and through personal statement writing. *Journal of English for Academic Purposes*, 37：70–87.

Omata, T.（2017a）The essay for the designed material 'Understanding and Expressing Yourself for UK University Application'. *Unpublished manuscript, UCL Institute of Education, UK.*

Omata, T.（2017b）*Understanding and Expressing Yourself for UK University Application*. Unpublished manuscript, UCL Institute of Education, UK.

Sawyer, E.（2016）*College Essay Essentials：A Step-by-Step Guide to Writing a Successful College Admissions Essay*. Naperville, Illinois：Sourcebooks Inc.

UCAS（2014）*How to write a UCAS Undergraduate personal statement*. Available at: https://www.ucas.com/ucas/undergraduate/getting-started/when-apply/writing-personal-statement（Accessed：24 November 2019）.

中原淳（2019）"なぜいま，セルフ・アウェアネスが求められているのか."In ハーバード・ビジネス・レビュー編集部 *セルフ・アウェアネス*. 東京：ダイヤモンド社. pp. 1–12.

仲島ひとみ（2013）高等学校におけるライティングセンター設置の意義：3年間の実践を通して. 国語科教育, 74: 62–69.

公益財団法人 日本英語検定協会（2019）*準2級・3級ライティングテストについて*. Available at: https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/2017outline_p23w.html（Accessed: 25 November 2019）.

文部科学省（2019）*平成29年度高等学校等における国際交流等の状況について*. Available at：http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/koukousei/__icsFiles/afieldfile/2019/09/19/1323946_001_1.pdf（Accessed：24 November 2019）.

高崎朋彦（2013）海外進学の研究. 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 50：71–78.